

はじめに

いま、日本は超高齢少子化社会が歴史上、他に類を見ない速度で進行しています。

この三〇年間で出生数は半減し、若者の未婚率は急上昇し、日本は確実に人口減少時代に突入しました。

急速な少子化傾向の原因はどこにあるのか、そして少子化をくいとめるにはどうしたらいいのかは深刻な課題となっています。

なぜ結婚しないのか、なぜ子どもを産まないのか。

その要因の一つとして、女性の社会進出が進み、仕事を持つ女性が増加したにもかかわらず、仕事と育児を両立させる社会的条件が整っていないからだという考えがあります。

出産、育児のために会社を辞めてしまうと、育児に余裕ができて再就職したいと思っても、そこには厳しい現実が待ち受けています。

一度辞めた会社に再雇用される可能性は低く、他社への正規雇用での再就職は狭き門、パートタイムでようやく仕事に就けても給与水準は大幅にダウンしてしまいます。

せっかく積み上げてきたキャリアを捨てなければならぬ可能性があるのなら、子どもを産まないという選択をする女性が増えることも現状ではいたしかたないのかもしれない。

だからこそ、女性が安心して子どもを産み、健やかに子どもを育てることのできる社会にしていかなければ、この少子化をくいとめることは不可能でしょう。

ただ、ここで考えていただきたいのは、子育てと女性の社会進出は、相反するものではなく、両立するものでなくてはならないということです。

当然にその両者が両立できる社会であることが、女性にとって、ひいては日本の社会にとっても望ましい姿であり、少子化の根本的な対策になると考えます。

しかし、今の日本は、子どもを持った女性の「社会進出」にのみ視点が偏り、そのための支援ばかりが議論されていて、もう一方にある「子育て」の重要性については、誰も語らず、脇に押しやられてしまっているように思えます。

本当にそれでいいのでしょうか？

今、社会的な問題として取り上げられているのは「保育園不足」です。

「働きたいけれども、子どもを預かってくれるところがない」という訴えは、悲痛なものであり、マスコミも大きく取り上げ、政府もその対策に追われています。

特に、生まれて間もない「〇歳児」を預かってくれるところは非常に不足しています。〇歳児の場合、より年長の幼児に比べ、保育士の数が二倍から三倍以上も必要となり、どうしても施設数が需要に追いつくことができない状態になっています。

その対策として、「〇歳児保育の施設をたくさんつくること」がベストであるけれども、なかなかそうした施設が十分に供給できないことが問題であると捉えられています。

果たして、問題の根本はそこにあるのでしょうか。

「乳幼児の母親の社会進出」という側面からの対策は、大人、つまり働く親の側からのみの必要性を重視した対策です。

しかし、よく考えてみると、そこにいるのは親だけではありません。

子どもが、しかも赤ちゃんが存在しているのです。

子どもを産んだ女性の社会進出ばかりを優先するのではなく、まずは、赤ちゃんの人生こそ最優先する必要がある、赤ちゃんが安心して母親の元で育つていくための対策こそが最も必要な支援なのではないでしょうか。

「〇歳児」を保育施設において集団（たとえ少人数とはいえ）で保育することを、軽く捉えてはいないでしょうか。

それは子どもが、〇歳のときから母親と分離した状態で、長時間、不特定の他者と過ごすということなのです。

そこに問題はないのでしょうか？

こうした「母子分離」は、じつは動物の本来のあり方からみて、極めて不自然であるばかりか、非常に危険なことなのです。

確実に進行している少子化のもと、〇歳児期における母子分離が当然のこととして、日本中に広がってしまうことは非常に危ういことであり、ひいては国を、社会を破壊することにもなりかねません。

こうした観点から、保育施設で、母親と分離した形で〇歳児を保育するのではなく、少なくとも赤ちゃんが一歳を迎えるまでは、母親がみずから育てるべきであることを本書では提案します。

どうか、先入観をお持ちにならず、「〇歳児」とどう関わっていくべきか、赤ちゃんのために、大人はなにをなすべきかを一緒に考えていただければと思います。

網谷 由香利

「〇歳児保育」は国を滅ぼす
目次

はじめに 1

第一章 子どもを育てるとは

育児と性差の関係を考えてみよう 12

本来、男性のDNAに育児は組み込まれていない 15

母子分離の弊害が出てくるのは 18

第二章 母子分離はなぜ問題なのか

ここらの病も母子分離が原因の場合が多い 24

母子同一化によってここらの基礎が築かれる 26

○歳児保育はデメリットしかない 30

「待機児童」なんて一人もない 36

預けられていたときの外傷体験を思い出す 38

極端な集団保育による母子分離の失敗例 40

「子ども園」構想にも危うい面がある 45

幼稚園と保育園には本質的違いがある 49

第三章 いま、日本の子どもたちが危ない

乳幼児期の環境は後の人格形成に多大な影響を与える 54

霊長類における母子分離 56

「〇歳児保育が善だ」と誤解している日本 61

「放置される」という虐待もある 64

依存症が急増中 66

母親と保育士の違い 77

母子分離の危険性は明らか 79

子ども自身が背負う母子分離の弊害 82

母子分離は心理的虐待の一種である 83

第四章 ○歳児保育はやめよう

○歳児保育は「絶望」という孤独感をもたらす 88

日光東照宮の猿の母子の彫刻に学ぶ 90

赤ちゃんを育てることは何よりも楽しいこと 92

母親が働かなくても生活できる保障が必要 94

日本の企業にも少しずつ変化の兆しが 97

赤ちゃんが幸せになり国を滅ぼさないために 99

あとがき 101

第二章 母子分離はなぜ問題なのか

こころの病も母子分離が原因の場合が多い

これまでの日本社会の文化では、こころの病は、身内や身近な人たちの中でなんとか密かに解決するか、あるいは内側に隠してしまうという方法がとられてきました。

こころの病を専門家の元で治療すること自体、恥ずかしいことという意識がいまだにあり、抵抗感があるように思います。

ましてや健康保険のきかないセラピーを予約して、こころの悩みを解決するという文化は、残念ながら日本にはまだ根付いていません。

それでも私の研究所には、こころを病んだ方が相当数訪れます。

しかしそれも日本社会の中では氷山の一角、ごく一部に過ぎません。

そういう意味では、セラピーを受けようと思われる方はきわめて意識の高い方々だと

言えるでしょう。

遠方からも多くの方が面接を受けに来られます。

ふつうなら近所のどこかを探すのが当然でしょうが、なんとか解決したい、治りたいという思いから、遠距離でも何時間もかけて訪れるのです。

そうした皆さんは、ほとんどが「口^くコミ」で、知人や親戚の方から治療例や完治した事実を耳にされて、当研究所におみえになります。

それが、当研究所に全国各地から面接を受けに来られる方が拡大している理由でしょう。

面接に来られる方々が、もともとどなたのご紹介かなどは、ほとんど明らかではありません。

とにかく、治りたいというお気持ちでセラピーを受けに来られるのだと思います。

こうしたところの病で悩んでいる人たちの多くが、その淵^{えんげん}源をたどっていくと、乳幼児期において母子分離の状況で育てられた人たちであることに驚かされます。

母子分離の弊害というのは、乳幼児期には顕在化せず、多くはずっと後になってあらわれてくるのです。

そのため、母子分離との関係がなかなかとらえられなかったり、原因が分からずに悩む人々も多くなっています。

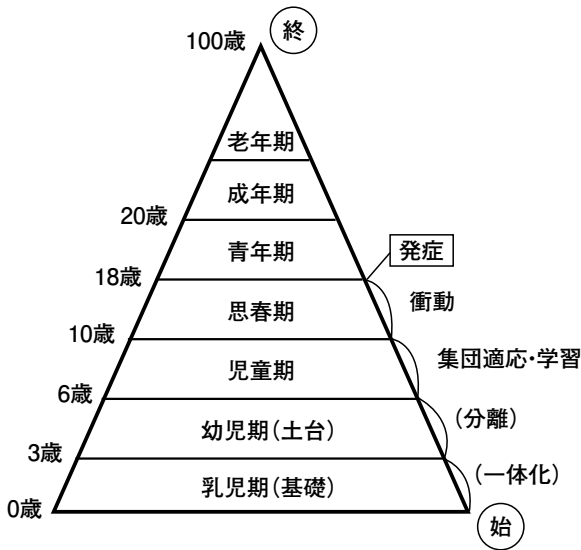
母子同一化によってこころの基礎が築かれる

人間の赤ちゃんは他の動物と比べて未熟な状態で生まれてきます。

赤ちゃんは自我が確立されずに生まれてくるため、赤ちゃんにとつて、母親は自分でもあり、母親の目や鼻や口などを、自分の部分対象としてとらえているのです。

よりわかりやすく言えば、母親を鏡かがみとして赤ちゃんは自身を見ているのです。

このような状態を「母子一体化」と呼びます。



赤ちゃんは生まれた直後の母親と同一化した状態から始まり、母親を安全基地として、およそ三歳くらいになると徐々に母親から分離していきます。

その分離が始まる以前に母親から引き離されると、こころの深い領域が「不安」な状態になってしまうのです。

建築でたとえるなら、基礎ができていないのに、立派な外壁をつくったり屋根をのせたりしても、やがて崩れてしまい瓦礫^{がれき}の山となってしまう

うのと同じです。

目には見えない基礎が、非常に重要であることがわかる例のひとつとして、地震があります。

直近では二〇一六年四月十四日に起きた熊本地震（気象庁震度階級では最も大きい震度7を観測する地震）は、今なお余震が続き、人々に恐怖と不安を与えています。

今回の大地震は熊本県のみならず大分県にも多大な被害をもたらし、多くの建物が倒壊しました。

しかし、そうした中でも比較的被害が少なかった建物は、基礎がしっかりしていたという共通項がありました。

建築の基礎づくりと同じように、人生早期の赤ちゃんの基礎づくりも、生涯にわたって多大な影響をもたらすのです。

このように重要な真実を、地震国に住む私たちに大地が教えてくれているような気がしてなりません。

母子分離は、赤ちゃんにとって大きなダメージとなるだけでなく、母親にとっても、計り知れない「損害」なのです。

深層心理から見れば、赤ちゃんとコミット（関与）することで、母親の「内なる赤ちゃん」が機能していると、内なるエネルギーが意識に回り、たとえばそのことによって感性や理解力など、母親のさまざまな能力が伸びていくのです。

ですから大げさではなく、赤ちゃんの〇歳から三歳までの時間というのは、母親にとって国家予算の一〇〇兆円よりも価値のある時間と言っていいでしょう。

どんな大富豪であろうとも、この貴重な時間を買うことはできないのです。

それほどに貴重な「母子同一化」の時間です。

あとがき

日々、非常に多くの悩みや問題行動で困っている方々と接しています。

そうした経験の中から、その原因が乳幼児期の母子分離にあることが明確にわかってきています。

たまたま世の中では、「保育園大増設！」のかけ声のもと、人びとの間でもマスコミでも、そして政治の世界でも、「なんとか保育園をたくさんつくって、待機児童をゼロにしよう」との大合唱が繰り返されています。

にもかかわらず、私は「〇歳児保育はやめたほうがいい」ということを本書で述べました。

〇歳から三歳、四歳から学齢期までという大きなくくりで、各時期に応じて大切なこ

とが異なり、さまざまな視点から、子育てにおける課題をあげることができるとしよう。私はそのなかでも特に、〇歳から三歳までの乳幼児期は自我が確立されておらず、基礎と土台づくりの期間であると考えています。

さらに、〇歳から一歳の一年間が、とりわけ重要であり、その子どもの一生を左右してしまうほどの決定的な影響を将来にわたって及ぼす、ということの皆様にお伝えしたく、この本を著しました。

社会一般では、望ましいと思われる「〇歳児保育」が危険だということは、すでに多くの実例によって示されています。

私たちは、あくまで、赤ちゃんを主人公として、この問題を考えていくべきだと強く思います。

大人の勝手な思惑おもわくで赤ちゃんの聖域を一步でも犯すことは断じてなりません。

この日本をこれから支えていってくれるであろう子どもたちに、大人は最善の舞台を用意してあげる義務があるのではないのでしょうか。

その舞台の第一幕が、「〇歳から一歳」の一年間、三六五日です。

「〇歳児保育は、百害あつて一利なし」です。

どうか、この厳肅な真実をみなさまに直視していただきたく願います。

二〇一六年 六月吉日

著者

網谷 由香利 (あみや・ゆかり)

心理療法家。臨床心理士。北海道出身。東洋英和女学院大学大学院人間科学研究科(臨床心理学領域)、博士後期課程で博士(人間科学)号取得。

心理療法によるこころの治療に取り組む傍ら、心理的治療のみにとどまらず、一般向けの心理セミナーや著名な精神科医、心理療法家を招いての講演会や心理セラピスト養成のための講習会を継続的に開催するなど、多岐にわたり後進の養成に尽力。臨床的实践を経て、2014年、「一般社団法人佐倉心理総合研究所」設立、理事長に就任。

著書に『子どもイメージと心理療法』『あんぐりいあかちゃん』(論創社)、『子どものこころが傷つくとき』『子どもの「こころの叫び」を聞いて』(第三文明社)など。

「〇歳児保育」は国を減ぼす

2016年8月20日 初版第1刷印刷

2016年8月25日 初版第1刷発行

著者 網谷由香利

発行者 森下紀夫

発行所 論創社

東京都千代田区神田神保町 2-23 北井ビル

tel. 03 (3264) 5254 fax. 03 (3264) 5232 web. <http://www.ronso.co.jp/>

振替口座 00160-1-155266

装幀／奥定泰之

印刷・製本／中央精版印刷 組版／フレックスアート

ISBN978-4-8460-1555-8 ©2016 Amiya Yukari, printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えます。